

第9話〈石器出土〉の要約と参考資料

第9話の要約

「どうして人は不便な山奥で暮すようになったのか?」。しかし土呂久で石器が見つかり、獣骨や土器のでてくる場所もあると知ったとき、気づきました。宮崎平野で弥生人が暮らし始めるより、ずっと早い時期に古代人は祖母・傾山系で生活していましたのです。

第9話の参考資料

9-1 土呂久出土の石器 (土呂久図書館 A-1-6 DSC01703)

岩戸神社の徴古館の展示品を見て (1983年1月)

- ① 佐藤次生氏出品の打製土器が2点展示されている。
イは石斧だろう。
ロは割れている。
はたして石器時代のものか? 人為的な形といえるのか?
- ② ハ 土呂久というレッテルが貼ってある。石棒の先端だけなのか?

9-2 日之影町の出羽^{いずるは}洞穴について

日之影町「郷土の自然と文化財」(1983年1月)のP63より

大分県との境の一部をなす本谷山の中腹、標高920メートルの位置にあって、日之影川に流れている沢との比高は約7メートルである。昭和40年から、鈴木重治教授を団長とする南九州大学考古学調査団によって発掘調査されたが、主洞は間口8メートル、奥行13メートル、入口の高さは3、4メートルであり、洞内は入口より次第にせばまり、奥壁付近では3メートルに満たない。

調査の結果、旧石器時代から新石器時代にかけての先住民族の生活の場であり、鉾物組成の分析の結果は、すべての層が阿蘇の火山灰から成っており、1万5千年前から8千年前のものと思える石器類が出土し、県の総合博物館に保存されている。

「高千穂町史」のP1より

鈴木氏の報告書(昭和42年日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会「日本の洞穴遺跡8 宮崎県見立出羽洞穴」)を要約すると、第2層から縄文早期の押型文土器と条痕土器、石鏃6個と石匙2個で大体8千年位前の遺物であり、第3層からは土器は無く、尖頭器(石の槍=ポイント=)、削器、斧形石器、^{こうだき}敲打器、石核、剥片(皮はぎ)、ナイフ型石器で、1万5千年位前と思われ、4層と5層には遺物は無く、6層から削器と加工痕のある剥片が出土している。

一方の岩陰からも第5層に相当するところから、ほぼ洞穴と同じような石器が発見さ

れている。

この出羽遺跡の第6層の地層から出たチョッパーという打器は2万年以上も前のものであると計算されておるので、この洞穴には2万年以上も前から人類が住みつき、石だけしか使うことを知らなかった時代から、土器を使うようになって自然の穴居生活から建築物の生活に至る迄、随分長い間人類が住みついていたことを立証している。(略)

出羽は今は行政上、日之影町に含まれているが、高千穂の一部であり、高千穂では出羽に限らず、各地の洞穴や岩陰に人類が住んでいたものと思われる。

9-3 宮崎市の櫛遺跡について

「宮崎県史 通史編 原始・古代1」のP298~P300より

ここでは(弥生)前期の墓地遺跡である^{あおき}櫛遺跡とその周辺遺跡および出土遺物などから県内の弥生文化の成立を探ることにしよう。

櫛遺跡は、宮崎市立櫛中学校の校庭内にあり、新別府川の北岸に形成された古砂丘の南端部にあたる。昭和26~27年(1951~1952)にかけて、弥生前期に編年される小児用甕(壺)棺^{かん}が該地から発見され、一躍学会の注目されることとなった。その後、昭和31~34年(1956~59)にかけて数回にわたり調査がおこなわれ、その結果、積石墓^{つみいしぼ}と小児用甕(壺)棺からなる墓地であることがわかった。遺物は埋葬施設であるため、甕(壺)棺として用いられた土器と供献用の小型土器に限られていた。(略)

ところで、この時期の集落遺跡と墓地遺跡との関係は、それぞれが分離独立しているものの、住居に近接して墓地が設けられていた事実が確認されている。櫛遺跡もこの例からすれば、墓地遺跡の近くに集落が存在していた可能性は大きい。しかも、古砂丘の東西には沖積地も広がっており、水田開発も可能ではなかったかと推察される。